

『文学研究科紀要 別冊第一七集』 文学・芸術学編 抜刷
(一九九〇年早稲田大学大学院文学研究科)

周作人と明末文学 — 「亡国之音」をめぐって—

小川利康

周作人と明末文学

——「亡国之音」をめぐる——

小川 利 康

はじめに

三〇年代前半の小品文運動は、明末公安派・竟陵派の散文を範にとつて進められ、左翼文芸作品とは対照的な繊細な筆法によつて知識人層から強い支持を受けた。運動の盟主的役割を果たしたのは、雑誌「論語」・「人間世」の主編たる林語堂と言うべきだが、運動理念の基本的枠組みを提供したのは「中国新文学的源流」(三二年九月刊)の著者周作人であった。同書は、三二年二―四月にかけて行われた輔仁大学での学術講演の筆記録で、中国文学の歴史を「即興的な言志」と教条的な「載道」との対蹠的傾向の交替の繰り返し¹⁾として描き出した斬新さで今日もなお少なからぬ意味を持っている。なかでも、当時の小品文運動に最も大きな影響を持ったのは、五四時期の文学革命の主張が明末公安派の主張「独抒性靈、不拘格套」の復活だとし、両者を言志派と位置づけた観点である。例えば、林語堂は同書読了直後に、「現代散文の源を明末公安、竟陵派に求め、鄭板橋・李笠翁・金聖嘆・金農・袁枚諸人をこの派に含め、現代散文の祖先と考へる」(「新旧文学」²⁾)周作人に強い共感を示しており、小品文運動への影響が看取される。この運動の副産物として生まれたのが明末小品文ブームであり、その影響は今日の公安派研究者にも及んでいる³⁾。

周作人と明末文学

こうした小品文運動に対し、魯迅「小品文的危機」に代表される批判の声が三三年頃から高まる。「小品年」⁴⁾とさえ称された三四年に発表された周作人の打油詩(戯れうた)「五十自寿」への批判も、その流れの中で生まれたものであろう。魯迅は曹聚仁宛の書簡で「周作人の自寿詩には世間を風刺する意」があることを認めつつも、「かかる微辞ではいまの若い人には通じない」⁵⁾と批判し、次のような感想を洩らしている。

これ(打油詩批判・小川)また「古よりこれあり」、文人美女は亡国の責めを負うべきであるので、近ごろでは国が亡びようとするのを感⁶⁾じた人が、責任を清流とか世論におしつけております。

文中傍線部について、『魯迅全集』(一六巻本)注記では、「明末の士大夫の矯激卑下およびその国を誤った罪状」⁷⁾と題する文章によつて魯迅の言を裏付けている。小品文批判や周作人の打油詩への批判と同列とは見なせないものの、明末になぞらえて現代の文学者を批判する風潮が少なからずあったことを窺わせている。そうした状況を在北平(北京)の周作人も鋭く感じとつていたようで、翌三五年「関于苦茶」で次のように語っている。

昨年春、たまさか作つた二首の打油詩が思いがけず引きおこした上海での騒動は、おおかた今年の所謂中国本位文化宣言にも匹敵しようが、異なるのは、前者(打油詩・小川)を皆が亡国の音と考へたのに対し、後者(中国本位文化宣言・小川)はといえば、「国家、将ニ興ラントセバ必ず預祥アリ」とみた点である⁸⁾。

自嘲的ユーモアを含んだ言葉だが、魯迅が指摘していた「亡国の責め」を文人に押しつけようとする風潮を意識していることは確実である。無論、小品文批判や打油詩批判と異なり、周作人への直接の批判の所在を確かめることは出来ないが、明末の文人を評価する周作人にとっては無視できない風潮であつたろう。打油詩と同じ三四年に発表された「重刊「袁中郎集」

序」でも「亡国之音」という批判への反駁を意識して書いているほか、その後も何度か言及しており、そこには三〇年代前半期における明末文学への関心の意味が浮き彫りにされていると思われる。本稿は、周作人の明末文学への関心の検討を通して、二〇年代半ばから三〇年代前半までの周作人の文学観の連続性を把握しようとするものである。

Ⅰ 「亡国之音」への反駁

「袁中郎集」序」は、民国期の桐城派文人が公安派を批判する一節「明末の詩文派も公安・竟陵に至ると妖妄変幻の極みと言うべきで、亡国の音とはこうしたもののようで、⁽¹⁰⁾に見える「亡国之音」に反駁を加えたものである。その結びで「私は公安派ではないが、亡国の音という諛から逃れられないのも時節であり、運命である。」と述べるように、やはり魯迅の言う「亡国の責め」を意識していたのは確実である。

まず、「亡国之音」とは何を意味するのか。周作人はその典拠である「礼記」樂記第十九を引いて論じる。

「礼記」樂記を調べると、曰く、「亡国ノ音ハ、哀シミテ以テ思フ、其ノ民困メバナリ。」孔穎達疏曰く、「亡国トハ将ニ滅亡セント欲スル国ヲ謂フ。音ノ悲哀愁思スルヲ樂ムトハ、亡国ノ時民心哀思シ、故ニ音亦タ哀思セルヲ樂ムヲ言フ。其ノ人困苦セル故ニ由ルナリ。」

続いて「桑間、濮上ノ音、亡国ノ音ナリ。」という一節も引き、この箇所について鄭注が「亡国ノ音」を「靡靡之樂」とする説も紹介するが、やはり経文自体を信じて「哀シミテ以テ思フ」の説を採用した方がよいと結論づける。そして、「中郎の文章には「悲哀愁思スル」部分があると云っても、もとより構わないのでから、「亡国ノ音」と言えるかもしれぬ。」と述べ、

その「悲哀愁思スル」感情の例として、「詩經」国風「兔爰」を挙げ、次のように弁護する。

こうした感情は明末の人々の心には大抵普遍的なものであろう。

少々閑適めいた態度も実は憤懣の一種で、「尚クハ寐ネテ叱ク無ケン」(「兔爰」の一節で、「悩み多き時代に生まれ、目覚めていれば心配ばかりで、どうか寝て動かずにいたい」の意…小川)の意味なのだ。⁽¹¹⁾

それ故、外国の隠逸と異なり、中国の隠逸は政治的であると説明し、「論語」で「滔滔タル者、天下皆ナ是レナリ。而シテ誰ト以ニカコレヲ易エン」と乱世を改める徒勞を孔子に語った隠者を例に挙げる。この隠者も明末の人々と同じく表面的には「閑適」であっても、そこには現実社会に対する「憤懣」が内蔵されているというのである。この明末の世情に対する見解は、「五十自寿」への評語と響き合うものがある。評語とは畢竟本人以外の言辞である以上、それを以て周作人自身が両者に同質の心情を認めていたか否かは明らかにできないが、先に引いた魯迅の評語以外にも「幽閑に沈痛を寄せる」(林語堂⁽¹²⁾)や「燃えさかる炎が今も冷たい灰の底にある」(曹聚仁⁽¹³⁾)等、現実への不満を藏した閑適と共通するものであり、当時の周作人の心情も、それほど遠い所にあつたとは思われない。三四年一二月の「論語小記」でも次のように語っている。

「滔滔タル者、天下皆ナ是レナリ。而シテ誰ト以ニカコレヲ易エン」という言葉は、最も良く私の態度を言い表している。「晨門曰ク、是レ其ノ不可ナルコトヲ知りテ而モコレヲ為ス者カ」という言葉は最も良く孔子の態度を言い表している。突き詰めれば二者の源は一つで、何故なら、どちらも不可なるを知りつつ、一方はなおも行おうとし、もう一方はもう行おうとしないに過ぎないからだ。⁽¹⁴⁾

こうした言葉からも、周作人が明末の「悲哀愁思スル」心情と同質のもの

を現代人の自分に見出していたのが読み取れよう。

以上のように周作人は「亡国之音」を解釈してみせた上で、先に示した「礼記」の言葉に拠りながら、次のように反駁する。

いずれにせよ、これは全て或る現象の原因を明らかにするものだ。

礼記に云う、「情中ニ動く、故ニ声ニ形ル。声、文ヲ成ス、之ヲ音ト謂フ。」と。その感情が動かされるのは、世が乱れ政治が誤ったり、国が亡び民が苦しんだりしたために、その声も怨み怒り、悲しみ憂えるのであつて、決して故無く急に怨み怒り、悲しみ憂える音を発するのではないし、ましてや怨み怒りの音を発したから、乱れていない世が乱れ、悲しみ憂える音を発したから、亡びていない国が亡びる訳ではない。⁽²⁰⁾

二年後に抗日戦争を控えた、この冷静な言辞は、因果関係の顛倒を鋭く批判するものと言えよう。「礼記」から社会情況↓感情↓文という素朴な反映論を借りながら、中国が亡国の危機に置かれた真の原因を見落とし、文学に亡国の責任を押しつける動きへに反駁するものである。亡国の結果に過ぎぬ「怨み怒り、悲しみ憂える音」を「受動的に発した者に詮議立てするべきでない。」と抗日戦争直前まで繰り返し語っている。三六年二月「陶笥庵論竟陵派」でも朱彝尊「静志居詩話」の公安派批判の一節「詩亡ベバ国モ亦タコレニ随フ」を次のように批判する。

ちようど「亡国ノ音ハ、哀シミテ以テ思フ」という言葉に基づいて、「音」が先に「哀シミヲ以テ思」つたために立派な国も亡んでしまうと言ふのと同様に通じぬ話で、まさしく中国伝統の政治的文学観の精義であり、(以下略)⁽²¹⁾

こうした見解でも、原因と結果が顛倒された矛盾を繰り返し突いている。この文学観を特徴づけるのは、社会情況の変化に左右される人々の感情の

反映として受動的に文学を捉える点であろう。こうした亡国の予感によって明末と現代とを重ね合わせる観点はどのようにして生まれたのだろうか。

II 『中国新文学的源流』における言志派と載道派

『中国新文学的源流』で提起された「言志派」という概念によって、現代文学を明末公安派の復興とする観点が成立したことは、冒頭で既に述べた通りである。従つて、「言志派」がいかなる文学観の下で生まれたのか、検討する必要がある。「中国新文学的源流」のほかに、三〇年九月発表の「近代散文抄」序」にも「言志派」への言及があり、これらの背景として指摘できる文学観は次の二点にまとめられる。

i 「文学無用論」。即ち、文学は単なる「思想感情の表出」で充足する「無目的」なものだから文学は現実世界では何の役にも立たぬという論理。

ii 「個性の重視」。即ち、個性を自由に発揮できる「頹廢時代」こそ文学が盛んとなるという論理。

前者は「中国新文学的源流」序論で述べるもので、文学起源論から演繹された論理である。後者は同書の本論及び「近代散文抄」序」で述べるもので、言志派と載道派の対立的傾向によって文学史を整理する上で不可欠な論理であった。この二つの論理が周作人の内面において、どのように有機的に結び付けられていたのか、具体的な検討を進めてゆく。

i 「文学無用論」と言志派

『中国新文学的源流』序論で、宗教儀式が本来の呪術としての目的性を失つたから文学は発達してきたと周作人は述べ、「詩経」大序から詩の起源を説く一節を引いて説明する。

情、中二勳ケバ、而チ言ニ形ハル。コレヲ言フテ足ラズ、故ニコレヲ嗟嘆ス。コレヲ嗟嘆スルモ足ラズ、故ニコレヲ永歌ス。コレヲ永歌スルモ足ラズ、知ラズシテ手ノコレニ舞ヒ、足ノコレニ蹈ムナリ。⁽²⁴⁾

この一節は「重刊『袁中郎集』序」で引く「札記」樂記十九の言葉と殆ど同義であろう。この前提から導かれた文学の性格は、「感情だけで目的がなく」、「作者の思想感情の伝達で充足し、他に目的はない。」⁽²⁵⁾といったものであった。これは文学を思想感情の反映と見る点で「亡国之音」反駁の前提となった素朴な反映論と同じ論理であり、文学を感情反映の受動的産物に限定するものである。この文学の定義からすれば、文学は現実世界に対して何ら能動的な作用を持ちえない。現実世界において「文学は無用なもの」⁽²⁶⁾であると周作人が述べるのは、この文学の受動的な性格に由来する。従って、現実的には無用な文学に残された役割は、所謂カタルシス（浄化作用）のような、現実世界での不平を解消する「消極的な面での効用」にあるとされ、序論を次のように締めくくっている。

文学はどうやら社会で失敗した弱者のためにだけ必要なようで、良境遇に有り、不満のない人間は何時でも何でも全て思いのままなのだから、文学は当然必要ない。(中略)まだ他に積極的な方策が有る限り、もう為す術が無いか不可能になっていない限りは、政治腐敗などにしても、当然政治改革運動へ実地に参加出来るので、文学で不平を洩らす必要はない。⁽²⁷⁾

「消極的な面での役割」を敷衍して述べるこの一節は、「亡国之音」への反駁の論理とほぼ重なりあう。明末の人々の「憤懣」を反映した「亡国之音」とは、一般論に置き換えれば、「社会で失敗した弱者」や「政治改革運動」に可能性を見出しえなくなった人々の「不満」「不平」を表現した文学であるとしても差し支えないであろう。また、既に指摘したように、社会

↓感情↓文学という因果関係の図式から導き出された、文学を受動的産物に限定する論理においても共通し、この時点で「亡国之音」への反駁の論理が既に準備されていたのは明らかである。

一方、以上の「消極的な面での効用」と対立する「積極的な面での効用」が認められない理由を補足的に説明する。

文学を有用たらしめようとしてもよいが、そうなるともはや変相的文学である。(中略)喧嘩の際には椅子・インク壺で人を殴れるだろうが、人を殴るのが椅子・インク壺の本当の役割ではあるまい。文学も然りである。⁽²⁸⁾

比喩を整理すれば、文学を他の手段とすることへの批判と言ってよいだろう。文学は「作者の思想感情の伝達で充足し、他に目的はない。」という見解の敷衍である。このように文学の目的性を否定する見解から、現実世界での不満解消の役割と、他の目的的手段とすることへの批判を提示しているとは概括できよう。

以上の序論を前提として提起されたのが、「言志派」・「載道派」の対立的概念と考えられる。両者はそれぞれ「消極的な面での効用」・「積極的な面での効用」と極めてよく対応するのである。本論での説明によれば、言志派とは「書經」堯典に言う「詩ハ志ヲ言ヒ」⁽²⁹⁾から採ったとされる。鄭注には「詩ハ人ノ志意ヲ言フ所以ナリ。」⁽³⁰⁾とあり、これは「詩經」大序の言葉(本頁上段前掲)とほぼ同義と言えよう。前掲の周作人の引用は「詩ハ志ノ之ク所ナリ。心ニ在ルヲ志ト為シ、言ニ発スルヲ詩ト為ス。」⁽³¹⁾という一節に続くもので、共に詩を思想感情の表出と捉えるものと考えられる。一方、載道派とは周敦頤「通書」に言う「文ハ以テ道ヲ載ス」から採ったもので、周作人によると「文学を工具」とし、「その工具によって他の更に重要なもの——「道」を表現する」⁽³²⁾ものであるとされる。こうした性格は「積極的

な面での効用」に相当するもので、序論で周作人が否定した文学のあり方であった。つまり、「言志派」「載道派」とは序論における「文学無用論」を具体化するモデルに与えられた名称であると考えられるのである。

こうした観点は「中国新文学の源流」以前から明末・現代の文学の共通点として、後述のように繰り返し言及されており、言志派の概念を形成するうえで大きな意味を持ったことは確かであろう。

ii 個人の文学としての言志派

「近代文学散文抄」序は、沈啓无の編になる明末小品文アンソロジー刊行の意義を讃え、小品文が「個人の文学の尖端にある言志の散文で」とありと説く文章である。その見解の説明として、「個人の『詩言志』・『集団の』文以載道」という表現で二つの対立的傾向の存在に言及している。即ち、後者の載道派を先史時代からの民族的集団創作の名残で、伝統的な技術を墨守するだけの非独創的な芸術と否定する一方、前者の言志派を高く評価するものである。言志派については詳しい説明が見られないが、載道派と対立的に捉えられるのであるから、言志派は反伝統的で独創的な個人中心の文学と言えよう。こうした両者の性格を踏まえて、周作人は次のように述べている。

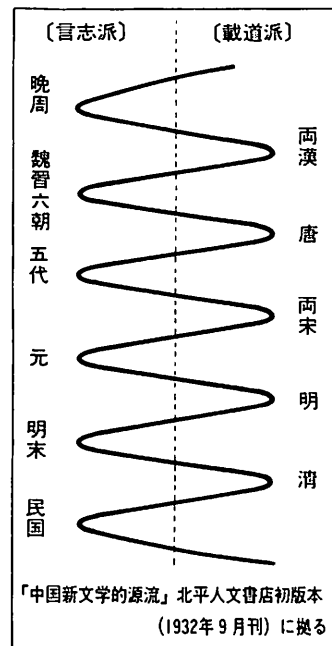
朝廷が強盛で、統治が統一された時代には載道主義が必ず勢力を持ち、(以下略)

頹廢時代になるや、皇帝祖師などの主要人物が大きな力を持たず、処士横議、百家争鳴となり、正統的な人々は人心は古のように純朴でないといふ大いに嘆くが、我々は多くの新しい思想、良い文章は皆この時期に生まれると感ずるのには、当然我々が「詩言志」派だからだ(以下略)。

この文脈だけでは「頹廢時代」の含意を読み取りにくいだが、文章からすれば、既存の体制が崩壊したために生まれた政治的・思想的に自由な時代

周作人と明末文学

と理解してよいだろう。その時代に如上の性格を持つ言志派が盛んとなるという論理は、「中国新文学の源流」本論にも受け継がれ、同書では中国文学の歴史を螺旋状に描き出す(図表)。



「近代文学散文抄」序より具体的だが、政情不安の時期を言志派に分類しているのは同様である。また、その理由として「文学の盛衰が決まって政治情勢の良否と相反」する(以下略)という説明も先の見解の要約と言えよう。

また、「中国新文学の源流」では言志派の性格を次の明末公安派の主張によって概括している。

「独抒性靈、不拘格套」(専ら個性の発展に努め、古い形式に囚われない。)

「信口信腕、皆成律度」(腕にまかせ口にまかせ自由にやり、しかもそれが自ずと律度をなしている。)

これらと胡適の主張「八不主義」との類似を周作人は再三指摘しており、ここからも個性重視、伝統的格式の反発の二点が公安派と現代文学の共通点として浮かび上がる。この言志派の性格は、二〇年代後半の文学観には見出されないもので、明末公安派への共感から醸成された観点とも考えら

れる。しかし、「中国新文学的源流」小引で「別に明末の公安派から得た発想ではなく」、公安派の文章に接する以前から如上の見解を有していたと周作人は述べている。むろん韜晦の言辭と受け取れないこともないが、後述するように、一三年一〇月脱稿にも係わらず、二九年四月に漸く発表された「新文学的の二大潮流」に、その観点は既に提示されていたのである。

III、二〇年代後半における「文学不革命論」

二〇年代後半の明末文学への言及の殆どは俞平伯の著書に与えた序跋に見出される。その中に言志派という表現はまだ無いが、その基本的な発想は充分に窺われる。二八年一月の「燕知草」序⁽³⁵⁾では、明末・現代の散文の類似を指摘し、次のように述べる。

明代の名士の文芸は確かに隱遁の色彩があるが、根本はむしろ反抗で、(中略)大多数の真の文人は反礼教の態度が明確であつて、その系譜は李笠翁、袁子才まで全く絶えはしなかつたと私は信じている。⁽³⁶⁾
また、これ以前の二六年一月の「陶庵夢憶」序⁽³⁷⁾でも次のように述べていた。

明清の名士の文章を幾らか読むと、現代文の趣きと殆ど同じで、無論幾らかの思想的隔たりは免れないが、明人の示す礼教への反発は、実に現代的な雰囲気がある。⁽³⁸⁾

後者の言葉は二八年五月の「雜俎」跋⁽³⁹⁾でも引用されており、この頃の主要な見解であつたと考えられる。これらを整理すると、明末散文の持つ「隱遁の色彩」を認めつつも、その根底に「反礼教の態度」を見出し、明末と現代の散文を結びつけたと言えよう。「現代の散文は新文学の中で最も外国の影響が少なく、文学革命というよりむしろ(明末散文の…小川)

文芸復興の産物というに相応しい⁽³⁸⁾」という見解も、やはりその共通点を踏まえてのものであろう。ここでの見解から「中国新文学的源流」での言志派の性格と共通するものを直接見出すのは困難だが、「燕知草」序⁽³⁹⁾では明末の文人に隱遁の色彩が見られる点について、更に次のように解説している。

現在の中国の情況はちやうど明末のようであり、竹竿すら持てぬ人は芸術の世界に避難するしかないのも怪しむに足らぬ。私は常々思うのだが、文学とは革命せぬもの(原語ハ不革命)小川)で、革命できるなら文学やその他の芸術、宗教は要らない。というのも、既自分の(革命という…小川)世界があるからだ。⁽³⁹⁾

この解説を整理してみる。「竹竿すら持てぬ」ような、現実世界で無能な者は「芸術世界に避難」させるを得ない。これが「隱遁の色彩」の意味である。逆に現実世界で「革命できる」力があるなら、そうした現実逃避の場である「芸術世界に避難」する必要はない。従つて、文学とはハ不革命であるという論旨であり、「隱遁の色彩」とハ不革命という表現は、現実逃避という点で同じ意味を持つと考えてよい。ここで注目されるのは、文学を現実世界で無能な者のためにあると強調する点である。「中国新文学的源流」での「社会で失敗した弱者」や「政治改革運動」に可能性を見出さない人々のために文学があるとする見解(前掲II—)と大きな差異は認められないであろう。また、ハ不革命と反抗という表現について、次のように述べる。

文学は革命せぬものであるが、がんらい反抗するものであり、明代の小品文でも、現代の新散文においてもそうである。⁽⁴⁰⁾

この解説は、明人には「隱遁の色彩」があるが、根本は反抗であるという先の見解を言い換えた表現であろう。つまり、「反抗」とは、少なくとも

「芸術世界」・「文学やその他の宗教」という精神的な面での反抗を意味すると考えられる。こうした「文学不革命論」は二七、八年当時の周作人の文学観の中でも主要なものであった。二八年の「大黒狼的故事」序⁽¹⁾では次のように「不革命論」を説いている。

文学はがんらい革命せぬものであって、(中略)もし弁護するとしても、少なくとも文学即ち革命とはいえない。革命がもしアヘンだとすれば、文学はちやうど「ヤチナイ」だろうか？金もあり、権勢もある人が大胆にアヘンを吸うように、血気盛んな青年は現代に対し不満を覚え、身を挺して決起し、危険を冒して命がけて革命をやり、決して家で溜め息をつき、呪いの言葉を吐いたりして、胸のつかえをとつたりはしない。⁽²⁾

比喩の多い、直截さを避けた表現だが、現実には革命をなしない者を満足させる役割をするのが、文学であると理解してよいだろう。ヤチナイがアヘンの代替品ならば、文学は革命の代りとなる。以上の「不革命論」に照らせば、「燕知草」序⁽³⁾での「文学は革命せぬものだが、もともと反抗するもの」だという表現を、現実的には何ら行動出来ないが現実に対する不満を心中なお蔵しているため、精神的な「反抗」の心情だけは残るといふ論理として理解出来るよう。これは、「中国新文学的源流」で指摘する「消極的な面での役割」と一致する(前掲II—)。更に言えば、三五年当時、「亡国之音」という批判に反駁して述べた、表面上は「閑適」ではあつても内面には「憤懣」を蔵しているといふ見解(前掲I)にまで一貫するものであつたと考えられる。

この「文学不革命論」と同様、現実世界での不満を解消する場を文学世界に求める見解は、「陶庵夢憶」序⁽⁴⁾にも見出される。

「現在」に対し、誰しもきつと不満があり、(中略)だから多くの人

周作人と明末文学

は現実の世界から逃避する傾向があり、夢想あるいは回想だけが甘美な世界だと感じるのだ。(中略)これは別に保守とかいうのでなく、本当にこうした過去こそ、我々がのんびりと手にして玩賞するに堪え、幾らか筆を加えても構わないからだ。⁽⁵⁾

周作人が「陶庵夢憶」を高く評価するのは、現実世界での満たされぬ不満解消の為に、何の制約も受けない「夢想」、または「回想」する「過去」といふ逃避の場を提供する点においてである。「夢想」・「過去」といふ言葉を「文学」に置き換えれば、「文学不革命論」と同工異曲と言つて差し支えないだろう。文学を現実と対立させて「夢」に替える見解は、二五年の「竹林的故事」序⁽⁶⁾にも見出され、「文学不革命論」を生む根底にあつた認識と思われる。

ここまでの検討から、現実と文学を対立的に捉える「文学不革命論」が二〇年代後半から表面化し、「文学無用論」へ至る道筋を読み取ることが出来る。明末・現代文学を重ね合わせる見解の一半は、二七、八年代頃から顕在化する如上の文学観を反映したものであつたと言えよう。

IV 「新文学的」二大潮流 における頽廃派と革命文学派

最初に「新文学的」二大潮流⁽⁷⁾が発表されるまでの奇妙な経緯に触れておかねばならない。論文付記によると、この論文を書き始めたのは二三年六月頃で、一度中断した(魯迅との訣別のためと思われる)後、一〇月に脱稿したが発表されず、六年後の二九年春、中国大学在学中の方紀生が参加していた「綺虹」第一期に発表された。脱稿後うち捨てられていた論文を、何故改めて発表するのか、周作人は全く説明していない。だが、この論文は二〇年代前半から三〇年代にかけて著しい変貌を遂げた周作人の文学観

の連続性を明らかにするうえで、重要な手掛かりを提供してくれる。以下では、周作人の見解を整理しつつ、検討する。

この論文の骨子は、新文学における「革命文学派」と「頹廢派」という二大流派の誕生を予見し、革命文学は「樂觀的な理想主義であるがために」頹廢派を上回る勢力は持ちえないとするものである。論文の大半を費やして述べられる頹廢派の性格は、言志派の性格と極めてよく符合する。

冒頭、二大流派が生まれる背景として、現在の中国の「非人間的生活」への不満を指摘し、「文化的には既に中国は亡国であると言わざるを得ず、少なくとも人民の多くは亡国民の根性だ。」と激烈な調子で現状への絶望に満ちた心情を吐露してさえている。この不満から生まれる文学に必要な条件として、次のように述べる。

言い換えれば、真の個人主義の文学でなければいけない。今の時代は正に頹廢時代で、総体が分裂して個体が解放され、自ずと非常に独創的で偏向した文芸が生まれ、これは古典派から見れば衰退と考えられるかも知れぬが、実は時代の要求するものであり、また我々からすれば、ある点では個体が総体に統制される古典文学よりずっと面白くあり期待が持てる。⁴⁵

論旨を整理すると、「現在＝頹廢時代」という現状の下では「総体が分裂し、個体が解放され」る。そこには「独創的な、偏向した文芸」が生まれるという認識で、その文学のありようを一語で規定するのが「真の個人主義」である。七年近くの時間の隔たりにも関わらず、この認識は三〇年の「近代散文抄」序における言志派の性格の指摘と殆ど重なりあう。改めて前掲の文章の論旨を整理するならば、「現在＝頹廢時代」という時代の下では、「皇帝祖師」が統制力を失い、「処士横議、百家争鳴」の自由な時代となるので、「多くの新しい思想、良い文章」が生まれるとしていた。ま

た、こうした一致点に加え、「正統的な人々は」と嘆くが、「と挿入句的に加えられていた点も考えれば、偶然の一致とするよりも、「新文学的二十大潮流」が二九年に発表された当時、周作人自身がこの論文から逆に示唆を受けた可能性の方が高いと言うべきである。そして、周作人が己の旧作を再読し、示唆を受けたからこそ、方紀生にも閲読を許し、掲載の乞いを容れたのではないだろうか。ここに見られる個人主義を標榜する文学観と「近代散文抄」序・「中国新文学的源流」で展開されるII—iiの言志派観との類似は明らかにその可能性を示している。

また、ここでの「頹廢派＝真の個人主義」という主張は、明らかに厨川白村「近代文学十講」に依拠している。二三年執筆当時、周作人は同書の「近代人の悲哀」の影響によって、△現代人的悲哀▽（原語・小川）を描く頹廢派に強い関心を示していた。この悲哀とは即ち、現実社会の圧迫と個人主義の衝突に起因する悲哀や、靈肉の葛藤でデカタンに陥る個人主義の悲哀である。この論文での「真の個人主義」の理念にも少なからず△現代人的悲哀▽が投影されていたことは確実で、「近代散文抄」序にも見える所謂「頹廢時代」も、その影響と無縁ではあるまい。⁴⁶

再び本文に戻ろう。文中、周作人は第二の頹廢派の性格として「しばしば復古のような現象」が起きると指摘している。ただし、復古そのものではなく、「現在に対する反抗の運動で」あり、理想化された「古」は「一種の空想」に過ぎず、殆どユートピアの夢想と大差ないと説明し、次のように述べる。

彼らは未来に信を置けず、現在にも不満で、むろん過去を懐かしむのでもないが、未来に比べて確かで、現在と比べ不確かであるため、過去を利用して刹那にして永劫の情景を創造し、遣る瀬ない心情をいくらか慰めるのだ。⁴⁷

こうした指摘は、「陶庵夢憶」序⁽⁴⁾で文学を夢と置換可能なものと見なし、現実を対立的に捉える観点と共通する。二三、四年当時、H・エリスに学び、文学の持つ現実世界での欲求不満を代償する機能について、「自己的園地」所収の「文芸与道德」、「鏡花縁」で言及しており、その観点を受け継いだものと考えられる。

これまでの検討から明らかなように、「新文学的」二大潮流はIIで指摘した言志派の性格の二点を概ね既に提示しており、後の三〇年代における文学観に連続する周作人の文学観の骨格を示すものといつてよい。ここでの頹廃派への共感に見られる苦惱に満ちた個人主義は、とりもなおさず、周作人の文学活動における苦惱を代弁しているように思われる。近代的な自我の自由な発達を阻む中国社会の混迷は、理知的な人間にとって耐えがたい怒りと不満を強いるものであったろう。なおも捨てきれぬ希望と冷やかな現実への絶望とが周作人の内面に同居し、両者が交互に主旋律を奏でる形で、その文学観が形成されたのではないだろうか。

結語

五四時期に劣らず、「語絲」時代は女子師範大学事件などにおいて周作人の戦局的な一面を示した時期であった。その意味では、本論で提示した周作人像は一般的な見方と相反するとも言えよう。しかし、「語絲」時代が終わる二七年を転回点とし、周作人が徐々に変貌を遂げてゆく過程において、如上の周作人の文学観がその変貌に少なからぬ意味を持ったと考えられる。三〇年代、小品文大師として立ち現れた周作人の姿に当時の文壇が毀誉褒貶に沸いたのも、その変貌の底流をなす文学観が十全には理解されていなかったためではないだろうか。

奇妙な符合だが、北京大学に赴任して間もない一七年、翻訳以外では初めての文章「讀武者小路君所作一個青年的夢」を『新青年』に発表し、今の中国の情況では何を言っても受け入れられまいと思つて沈黙していたが、武者小路の作品を読んで考えが変わつたとして、次のように述べていた。

私は「其ノ為スベカラザルヲ知りテ、コレヲ為ス」必要を感じたのだ。力及ばず、成功は期し難いといえども、主張せざるべからず、為さざるべからず。今は無用でも将来の種を播けるなら、たとえ石の路の上に播かれ、芽を出さずとも、沈悶を少しは破ることが出来よう。

十七年後の「論語小記」で同じ「論語」の一節を引き、隠者の心情への共感を語ろうとは、周作人自身とて予期しえぬことであつたらう。この符合は二〇年代から三〇年代にかけての文学観が「為すべからざる」とする認識を根底としつつも、「なおも行おうとする」希望と「もう行おうとしな」(前掲「論語小記」)絶望の振幅の中で生まれたことを暗示している。「頹廃派」への傾倒から「亡国之音」への反駁まで一貫して文学観の根底にあつた現実と文学を対立的に捉える姿勢には、この絶望が投影されていると考えられるのである。

△注記▽*引用文中の傍線部は全て小川によるものである。

(1)「中国現代文学辞典」(東京堂八五年刊)所収、木山英雄氏執筆「中国新文学的源流」の項による。

(2)「林語堂書評序跋集」(岳麓書社八八年刊)二二〇頁(初出誌「論語」七期三二年二月一六日)。例えば、芦田孝昭「中国近代文学における文体改革運動としての小品文運動」(『文体論研究』十二・六八年二月)でも林語堂の小品文に関する具体的な見解として、「論文」上下(初出誌「論語」一五/二八期・三三年四月/一月)を挙げる。これは沈啓无編「近代散文抄」を讀んだ感想をもとに書かれたものである。

- (3) 例えば任訪秋「中国新文学源流」(河南人民出版社八六年刊)、張国光「公安派——四百年前我国文学革新運動的一面旗帜——兼論公安派」(村五四新文学運動的影響)、「晚明文学革新派公安三袁研究」(華中師範大学出版社八七年刊)等では公安派と文学革命とを結びつける観点が改めて提出されている。
- (4) 「現代」(第五卷三期七月号)「文壇展望」に見える言葉である。
- (5) 「魯迅全集」(人民文学出版社八七年第三版)第二卷三九七—八頁、訳文「魯迅全集」(学習研究社八五年刊)第一卷三三二頁に拠る。
- (6) 「魯迅全集」第二卷二九八頁、翻訳版「魯迅全集」第一卷三三二頁。
- (7) 同右
- (8) 「苦茶隨筆」(岳麓書社八七年刊)五頁なお、「中国文化本位宣言」とは国民党CC系によるもの。
- (9) 例えば、「関子命運」(三五年四月)「責任」(三五年八月)「文章の放蕩」(三五年九月)「郁風齋筆談」(三六年一月)「陶筠庵論竟陵派」(三六年二月)「梅花草堂筆談」(三六年四月)等。
- (10) 「知堂序跋」(岳麓書社八七年刊)五七頁
- (11) 「知堂序跋」六一—二頁
- (12) 「知堂序跋」六〇頁。原文「十三經注疏」(台北・芸文印書館影印版)附釈音札記注疏卷三七・六六三頁、訓読「札記」中(新釈漢文大系二八卷・明治書院七七年初版)四〇八頁を参照。なお、訓読を用いたのは原語を読みやすい形に残すためである。
- (13) 「知堂序跋」六〇頁。原文「十三經注疏」附釈音札記注疏卷三七・六六三頁、訓読「札記」中・四〇八頁
- (14) 「知堂序跋」六〇頁
- (15) 「知堂序跋」六〇頁。原文「十三經注疏」附釈音毛詩注疏卷第四・一五一—二頁、訓読「詩經」(漢詩大系一卷・集英社七八年刊第一〇版)二八六頁を参照した。
- (16) 「知堂序跋」六一頁。原文及び訓読は金谷治訳注「論語」(岩波文庫八二年刊)二五四頁を参照した。
- (17) 林語堂「我的话」下(時代書局四八年初版・上海書店八七年影印)「周作人詩説法」三二六頁
- (18) 曹聚仁「筆端」(天馬書店三五年初版・上海書店八八年影印)「周作人先生的自序詩」一〇二頁
- (19) 「苦茶隨筆」一八頁。原文及び訓読は「論語」二五四頁、二〇五頁による。
- (20) 「知堂序跋」六一頁。文中の札記の引用は「十三經注疏」附釈音札記注疏卷三七・六六三頁、訓読「札記」中・四〇八頁を参照。
- (21) 「知堂序跋」六三頁
- (22) 「風雨談」(岳麓書社八七年刊)八五頁。
- (23) 「風雨談」八五頁
- (24) 「中国新文学的源流」(岳麓書社八九年刊)一四頁。原文「十三經注疏」附釈音毛詩注疏卷第一・二三頁、訓読「一、中国古代歌謡の發生と展開」(赤塚忠著作集第五卷「詩經研究」所収・研文社八六年刊)三五頁を参照。なお、同論文四二頁でも「詩經」と「札記」の言葉が同義であると指摘されている。
- (25) 「中国新文学的源流」一四頁。なお、本稿での「中国新文学的源流」からの引用は拙訳に拠るが、松枝茂夫訳「中国新文学的源流」(支那学翻譯叢書之四・文求堂書店三九年刊)を参照させて頂いた。
- (26) 同右一四頁
- (27) 同右一六頁
- (28) 同右一六頁
- (29) 本文・鄭注とも原文「十三經注疏」附釈音尚書注疏卷第三・四六頁、訓読「書經」上(新釈漢文大系第二五卷・明治書院八三年刊初版)四三—四頁を参照。
- (30) 原文「十三經注疏」附釈音毛詩注疏卷第一・一三頁、訓読「一、中国古代歌謡の發生と展開」三五頁を参照。なお、同論文四二頁でも「詩經」大序と「書經」堯典とが同様の見解を有していることを指摘する。
- (31) 「中国新文学的源流」一七頁。
- (32) 以上の引用は「知堂序跋」三三九—三〇頁
- (33) 「中国新文学的源流」一九頁
- (34) 同右四八頁
- (35) 同右二頁
- (36) 「知堂序跋」三二六—七頁
- (37) 同右三二七頁

- (38) 同右三二七頁
 (39) 同右三二七頁
 (40) 同右三二七頁
 (41) 同右三九七―八頁
 (42) 同右三二五―六頁
 (43) 中国大学綺虹社「綺虹」第一期
 (44) 同右
 (45) 同右
 (46) 拙稿「五四時期の周作人の文学観」(「中国学会報第四二集」)を参照された
 い。
 (47) 中国大学綺虹社「綺虹」第一期
 (48) 拙稿「周作人とH・エリス」(「早大文研紀要別冊第一五集」)を参照された
 い。なお、この中で「新文学的『大潮流』」、「中国新文学的源流」に見られる
 循環史論がH・エリスの影響に拠るものであることも指摘した。
 (49) 「新青年」(第四卷五号)。文中で訓読した一節の原文は「知其不可為而為之」
 で、傍線部が「論語」の原文には無いが、同義と考えられる。
 通行本